

人魚 作 田辺剛

「登場人物」人魚／人魚を預かる男／その妹／占い師／村の男

現代の日本からは時も場所も遠く離れた世界。

とある小さな漁村では、人魚の歌声に誘われて行方不明になる漁師が後を絶たず問題になっていたが、村は多くの犠牲を払い人魚を捕まえることに成功した。人魚はある兄妹の家に置かれることになったが、村の者はその家に近づいてはいけないとされ、その兄妹だけが人魚の世話をしている。

舞台はその兄妹の家だ。部屋の片隅には人魚が網の中で横たわっている。小さなテーブルと椅子が二つ。衣類などが入った箱のようなものがある。

部屋には絶えず数匹の蠅が飛んでいる。

1

夜。人魚はすでに寝ている。兄妹が食事をとろうとしている。

兄 さあ、いただこう。

静かに食事は進むが、ふと妹はスプーンを置くと泣き始めた。

兄 どうしたんだ。

妹 なんでもない。

兄 なんでもないのに。

妹 スープがとても美味しくてつい。

兄 泣いてしまったのか。

妹 今日はとても良いハマグリが手に入ったの。わたしの腕というよりも、そのハマグリのおかげね。

兄 いい出汁が出ている。

妹 うん。

兄 ハマグリに感謝しないとな。

妹 そうね。

兄 それで泣くのか。

妹 ……。

兄 あいつのことか。

妹 (ふたたび泣き出す)

兄 またなにか言われたのか。気にしなくてもいいんだ。そうやってあれこれ言っただけか。いぢいぢい取り合っていたらきりがないじゃないか。

妹 呪ってやるって。

兄 なに。

妹 この村を呪ってやるって言うていたの。わたしはもう怖くて怖くて。

兄 そんな力はないさ。ただの人魚だ。せいぜい歌うくらいのことだろう。え歌ったのか？

妹 歌わないわ。ここではいつも文句ばかり。文句を言うては咳き込んで。喉をやられたと言っただけはまた文句を繰り返す。

兄 お前はそんなことばを使うんじゃないぞ。悪いことばだ。「呪ってやる」だなんて。

妹 ずっと言い続けているの。起きているあいだはほとんど。ボソボソした声が村中に響いて、みんなからなんとかしてくれって言われるのよ。

兄 みんなって？

妹 みんなよ。何を言ってるのかは分からないけど、ずっとなにか声が聞こえる。それが薄気味悪いんだって。歌ってる方がまだましだって。

兄 昼も夜中も関係なく。今は…：大丈夫だけど。

妹 聞いたことないぞ。

兄 兄さんは一度寝たら起きないのよ。聞こえる人には聞こえるの。今日、隣の奥さんが夜眠れなくて困ってるんだって。ずいぶんと怒られてしまったの。

兄 お前がかい。

妹、再び泣き出す。

兄 そんな、お前を怒っても仕方ないだろう。お前が悪いわけじゃないんだから。(と兄は立ち上がり部屋を出ようとすると)

妹 兄さん。

兄 話をしてくれる。文句があるならこっち(人魚)に直接言えって。妹 言えないでしょ。村の人が彼女に会うのは禁じられている。

沈黙。

兄 長老たちが今どうするかを話し合っている。ずっとここにいてるわけじゃない。

妹 そうね。

兄 他にはあるのか。

妹 え。

兄 あいつがお前に。文句を言うだけか。なにかされたりは。

妹 ……なにかをするってことはないけど……注文が多いから、大変。

村の子どもたちのこととか。彼女、子どものことをずいぶん嫌っているから。

兄 すまん。

妹 仕方ないわよ。長老たちの命令なんだから。

兄 お前一人で全部世話をすることになるとは思わなかった。

妹 仕方ないでしょ。村の人がゾロゾロやって来ると厄介だわ。どうせ

見たいだけ見たら帰って行く。手伝うこともない。

占い師 こんばんは。

兄 誰だ。

占い師が入ってきた。

占い師 (人魚を見て)これが…。

兄 見てのとおりだ。

占い師 そうね。

兄 違うわたしたちだ。夕食をとっているところだ。

占い師 わたしのことには構わなくていいから。

妹 こんばんは。

兄 どうしたんだ、こんな時間に。

占い師 さきほど長老たちから話を聞いてね。捕まえた人魚をあなたの家に置いてあるって。そういう肝心なことをわたしには教えない。まったく自分勝手な連中。

妹 ハマグリのスープがあるわ。とても良いハマグリが手に入ったの。

(と出ていく)

兄 それで見に来たのか。

占い師 わたしが占いで言ったのは、こいつを捕まえたら村人に分からないところに隠せということ。一刻も早く! 捕まえるのが仕方

ないにしてもこいつは陸地にはいけないものだから。

兄 俺は長老たちに命じられたんだ。ここに置いておくようにと。

占い師 それを聞いてわたしも飛んできたのよ。それにしても。何時間にもわたる捕り物だと聞いたわ。網にかかっても食い破ろうとしたら

しいわね…。

兄 おい、ちよっと大きい。

占い師 なに。

兄 声が大きいのと言っているんだ。

占い師 声。

兄 彼女が起きてしまっっては厄介だ。せつかく寝てるのに。夜も遅い。見るだけ見たらまた明日にしてくれないか。それとも長老たちのあい

だで彼女についての結論が出たのか。

占い師 まだよ。

兄 だったら! これであなたの用件も済んだということだろう。

占い師は部屋の中を飛ぶ蠅が気になる。

占い師 蠅か。蠅がとんでいる。うつつうしい。

兄 ずつとだ。

占い師 こいつにたかっているの。

兄 半分は魚だからな。多少の臭いはする。

占い師は人魚に近づいて見る。

兄 あまり近づくんじやない。

占い師 わたしを見くびるな！

妹 (スープの皿を持って戻り) お待たせ。

占い師 ……うむむ……怪我をしているの。

兄 捕まえるときに銚でつかれたんだ。

占い師 世話はあなたがしているのね。

妹 わたし一人だね、全部。

占い師 慣れないことだからずいぶんと苦労しているでしょう。

妹 もう限界。

兄 長老たちの結論はいつなんだ。

占い師 議論は今でも続いている。そう簡単な話でないのはあなたにも

分かるでしょ？ 判断をひとつ誤るとこの村の存亡にかかわる。慎重

に考えなければ。

兄 しかしいつまでもこのままというわけにはいかない。

占い師 (スープを一口飲んで) おいしい。

妹 良いハマグリが手に入ったの。

占い師 もうすぐよ。もうすぐ結論は出る。

沈黙。

占い師 食事はどうしているの。

兄 一日一回、海に出して泳がせて、そのあいだに魚を捕まえて食べている。逃げないように首に綱をつけて。

占い師 ……ここでは歌う。

兄 歌？

占い師 そう。

妹 歌わない。

占い師 どうして。

妹 陸の風が汚いと彼女は言っているの。すっかり喉をやられてしまったとかで、いつも咳き込んでばかり。二、三日で痰つぼもいっぱいになってしまうほど。

占い師 ……わたしはこいつの歌を聞いたの。この村で。かすかに……

歌かと思つて浜に出ると、確かにそう。風に乗って、海をわたつて、

わたしの耳に届いてくる。歌が！ きつと漁に出ている男たちにも聞

れてしまったことが出ている。しかも人数まで正確に！ 果たして、

そのとおり若い漁師が犠牲になっていたの。とても不吉な調べ。し

かし不吉だと分かっているながら、このわたしでさえ、その歌声を拒む

ことができなかった。どうしてもひきつけられてしまう。こいつが歌

う場所からはずっと遠くにいて、かすかに聞こえる程度なのに。

兄 それはどんな歌声なんだ。

占い師 ことばで説明できるものじゃないわ。

兄 説明できないとはどういうことだ。

占い師 あれこれ言つても、決してその美しさにたどり着くことはない。

そう、どんな歌声なんだと聞かれれば、結局は聞いてみるというほか

ない。

沈黙。

占い師 これはあなたたちだけに話すことよ。他の者に言つてはいけな

い。大切なこと。

兄　なんだ。

占い師　長老たちは、人魚の歌を聞いてみたいと思っている。

妹　え。

兄　どういうことだ。その歌こそがわたしたちの村にとつての災いだつたのだろう。それをわざわざ。

占い師　災いとは、漁師が彼女に食われてしまったことであつて、歌そのものではないと言ひ出したの。

兄　しかし。

占い師　まったく馬鹿げた話。十分に注意と準備をすれば、襲われることなく歌を聞くことができると思つている。

妹　その前に彼女は歌うことができないのよ。陸の上では。海に帰せと、こうなったのもお前たちのせいだとわたしは毎日言われているんだから。

占い師　海に帰すわけにはいかないでしょうね。

兄　じゃあ、あいつが歌うまでずっとこのままなのか。

占い師　（まとわりつく蠅に）蠅が！

兄　あなたの占いはどうなんだ。そんなこととして村に不吉なことは起こらないのか。

占い師　起こらないはずがない。だからわたしはやめろつて言っているの。けどあの連中と来たら、まったく耳を貸そうとしない。わたしの占いに頼るのはいつも都合の良いときだけ……じゃあごちそうさま。（と去ろうとする）

妹　そうだ、こんど占つて欲しいことがあるの。

占い師　なに。

妹　また後で。

占い師　好きな人でもできたんでしょ。

妹　そんなんじゃないわ！

そのとき人魚の目が覚めた。

人魚　ああまったく眠れやしない。冬の嵐でもこんなにいるさいことはない。

兄　ああ、目覚めてしまった。

占い師　なにこれ。どうしてそんな声……あの歌声はどこに消えたの。人魚　どうしてお前にわたしの歌声が分かる。

占い師　わたしには村の連中には見えないものが見え、聞こえないものが聞こえるの。あなたの歌声が風に乗って来るのをわたしは聞いているのよ。

人魚　それは頭がいかれていってという告白か。

兄　いつもだ。この口の悪さは。

占い師　まあいいわ。それにしてもその声の違いはなに。

人魚　歌うときと話すときは別だ。

占い師　歌つてみて。

人魚　断る！　それが初対面の者に向かっていうことばか。どうしてお前のために歌わなければならぬ。

占い師　なるほど、これでは先が思いやられる。

人魚　おいっ！　こいつを追い出せ。きわめて不愉快だ。まるで蠅のようなうつつとうしさだ。

兄　いいか、お前がどうなるか、この人の一存にかかっているんだぞ。

人魚　そうか、こいつがわたしを捕まえると命令したのだな。

占い師　わたしじゃない。

人魚　わたしをどうするつもりだ。

占い師　あなたは長老たちの前で歌わないといけぬ。そうなる。きっとね。歌つても食うことはできない。ただ歌うだけ。

人魚　どうして。

占い師　そうすれば、海に戻れるかもしれない。

人魚　わたしは見世物じゃない。そんなばかばかしいことができるものか。第一、お前たちのせいであつたしは歌声を失っている。歌を聞きたいなら、わたしといっしょに海に行くことだ。沖にある岩場に来れば人魚

聞くことはできる。そのあとはわたしの胃袋のなかだ。必ず！ いいか、必ずお前たちは後悔することになるだろう。わたしをこんな目にあわせて、この村は、ここに住む人間はみな呪われるのだ。

漁師が棒切れで人魚を打つ。

人魚 痛いつ、痛いつ…。

打たれた人魚は体を縮めて小さくなった。

占い師 やはり不吉なものね。

兄 今晚はもういいだろう。

占い師は漁師に促されて部屋を出た。

翌日の昼下がりに。妹は一輪の花をもって部屋へ入ってくる。ずいぶん嬉しそうにテーブルの花瓶に挿してそれを眺めている。

人魚 喉が渴いた。

妹 ……

人魚 おい。

妹 え、なに？

人魚 水を持って来い。

妹 あなたもこの花を見るといいわ。海では花を見ることがないでしょう。ねえ、こんなに小さくて愛らしい。誰の手が加わったわけでもない、そう、自然なままにあるだけなのに、この美しさと言ったら！ 人魚の手では及ばないものというのが確かにあるのよね。この可愛らしさをどうやって作ることができるかしら。この花はね、崖のところだけ咲いていて、ほとんど近づくこともできない。それをね、さつきもらったの。危ないことになるかもしれないのに。

人魚 わたしには水だ。危なくもない。

妹 「思いがけない」っていうのはこういうことを言うのね。ああ…：わたしは少し興奮してるのかしら。この花だって今でなければそれほど気にはならないかもしれない。確かに、あの崖に花が咲いているのは知っていたの。珍しい花だってこともね。けど、遠目に見てそれだけ。別に欲しいと思ったことはなかったわ。ましてや取りに行くなんて。けれどもこうしていま目の前にある！ ああ…：この可愛らしさに参ってしまいそう。だってね、ほら見て。今日もいい天気！ 雲ひとつない空の青さがずっと深く澄んだ色に見えるのよ。

人魚 それはお前の目がおかしくなってるんだ。

妹 そうね。目がおかしくなってるのよ。

人魚 優しい兄でよかったな。

妹 兄さんじゃない！

人魚 とにかくその雑草はいいから水だ。

妹 ……あなたはこの世のものとは思えない美しい声を持つというのに、

この花を理解できないの？

人魚 わたしは自分の声を美しいだなんて思ったことがない。お前らが勝手に騒いでいるだけだろう。

妹は水を取ってくる。

人魚 喉だけじゃない。この体もだ。わたしは生まれたときからずっと水のあるところで生活をしてきたんだ。こんなにも長い間、陸地にいたことはない。

妹 一日一回、海に入ってるじゃないの。

人魚 足りない。最近、だんだんと自分の体が乾いていくのが分かる。わたしは常に水の中にいるんだからな。お前たちだってそうだろう。逆のことを考えてみればいい。四六時中、水のなかにいれば体の調子もおかしくなるはずだ。

妹 今までは大丈夫だったのに。

人魚 なにか、病気になっっているのかもしれない。

妹 ……あなたがここに来たときは、わざわざバスタブを持ってきて、海の水をそこへ入れました。けれどもあなたはそのヒレで、水をバシバシとやってこの部屋を水浸しにしたでしょ。それで中に入れた水も無くなってしまった。継ぎ足しても同じことの繰り返し。そしてしまいにはバスタブを叩き割ってしまう、そのヒレで。

人魚 もうそんなことはしない。大人しくしている。お前たちに迷惑をかけるはしない。

妹 兄と相談するわ。

人魚 なんでも兄と相談か。

妹 そうよ。なんでも兄と相談するの。もしかすると長老たちの判断を仰がないといけないかもしれない。

人魚 そのくらいお前が決めてやればいい。

妹 複雑なの。特にあなたのことについては。

人魚 だったら早くしてくれ。

沈黙。妹は身だしなみを整えている。

人魚 しっしっ！ 花につられて蠅も入った来た。

妹 ひどい言いばかり！ 花のせいじゃないわ。

人魚 よく見る。いつもよりも蠅が増えているじゃないか。

妹 花には近寄って来ない。

人魚 しっしっ！ だったらなんだ！

妹はチラリと人魚を見た。

人魚 あ。わたしか。わたしが臭っているって？ 臭いが強くなって蠅も増えているって、そう言いたいのか！

妹は自分に香水をふった。

人魚 なんだそれは。

妹 なんでもない。それよりもこれ。喉が痛くなったら舐めるようになって。(と小さな瓶を人魚に渡す)

人魚 「舐める」？

妹 喉によく効くらしいから。

人魚 そんなことしたって無駄だ。陸に上がっている限りたいして変わらない。それに何度も言うがわたしは歌わない。

妹 それでも少しは良くなるかもしれないじゃない。咳だって治まるわ。

人魚 それよりも今さっきのシュツシュツとしていたのはなんだ。なにか匂いがする。

妹 とても高級な薬なの。長老たちが用意したもの。村の人間は手にすることができない。

人魚 ちょっと貸してみる。

妹 なにを。

人魚 お前が自分にふり掛けていたものだ。
妹 嫌。

沈黙。

人魚 蠅がうっとうしいんだ。お前たちだってそうだろう。

妹 あなたの臭いが消えるわけじゃない。それよりも薬。ねえ、長老たちの言うことは聞くべきよ。逆らったっていいことはひとつもない。

それどころか殺されるかもしれないんだから。

人魚 歌ってみせても、その後でどうせ殺すんだろ。だったらさっさと薬にしてくれ。

妹 だったら好きにすればいい。(と部屋を出ようとする)

人魚 どこへ行く。

妹 出かけるの。

人魚 またわたしを置き去りにするというのか。

妹 しばらくすれば兄さんが戻ってくる。

人魚 だったらそれまでお前も待っている。

妹 わたしは約束があるから。

人魚 なんだ約束って。

妹 あなたにわざわざ言う必要はないでしょ。

人魚 分かったぞ。その花を取ってきた男と会うんだろ。どうだ。

妹 だったらどうなの。

人魚 どんな男だ。

妹 聞いてどうするの。

人魚 海で出会ったときに間違って食べてしまわないようにだ。可哀そうだからな。

妹 彼に何かあったらあなたを決して許さないから。

人魚 そもそもお前は どうして食べずにいられるんだ。男が寄ってきて、目の前いて、それを食べないというなら一体なにをするんだ。なんの人魚

ために男と会う。

村の男が箱を抱えてやってきた。

男 こんにちは。

妹 あ。

男 (人魚を見て) これが。

妹 ここにはちよつと。

男 いいんだよ。いいのいいの。

男は箱をテーブルの上に置いた。

男 これ今日の分。

妹 今日の分。

男 そう今晚までに。

妹 今晚? こんなに?

男 夏だから。稼ぎ時だから。

妹 うん……

沈黙。

男 もつとうるさいんじゃないか?

妹 ええ。

男は人魚に触る。

人魚 触るな!

男 おおつ。

妹 危ないから。

人魚 誰だそいつは。

男 まだ歌わない?

妹 え。

男 歌。

妹 ええ。

男 (人魚に) わたしがあなたの世話をすることになった。

人魚 何の話だ。

男 長老たちから頼まれて、この兄妹に任せていても埒が明かないからって、あなたが歌えるようにいろいろとお世話をね。

妹 長老たちから?

男 俺を長老たちの代理人と置いていた結構だ。

人魚 だったらお前に言いたいことがある。

男 なんだ。

人魚 今も娘に話していたところだ。この苦痛! いったいいつまでわたしをこんなひどい目に合わせておくつもりだ。

男 さつさと薬を飲め。飲んでいるのか。

人魚 そんなもの飲んだらかえって調子が悪くなる。喉を痛めているのは陸地が上がっているからで、病気ではないんだからな。

男 話には聞いていたが、本当に口が悪い。

妹 いつまで彼女はここにいろの。

男 こっちの言うことに従えば話もまた変わるんだろうけどな。

妹 もううんざり。

男 出かける準備は。

妹 大丈夫。

男 (人魚に) 薬を飲めとにかく。話はそれからだ。きっとあなたにも悪いことにはならない。

人魚 おい、またわたしだけにするつもりか。

男と妹が出ようとするとときに兄が帰ってきた。

兄 なんだお前たち。

人魚

男と妹が出ようとするとときに兄が帰ってきた。

兄 なんだお前たち。

人魚

男と妹が出ようとするとときに兄が帰ってきた。

妹 兄さん。

兄 どうしてお前がここにいます。

男 仕事を持ってきてやったんだ。

兄 ここに来るのは禁じられている。

男 俺はいいんだ。

兄 どうして。

男 そいつが歌を歌えるように世話をすることになった。あんたたちだと埒が明かないんでね、長老たちの我慢も限界だ。俺は特別な依頼を受けている。そいつを歌わせて商売をする。

兄 商売？

男 多くの漁師がこいつに食われて人手はずいぶんと減ったが、こいつが捕まれば残りの若いのがなんとか頑張つてやっていけるだろうと思われた。ところが、こいつが捕まってから今度は魚がいなくなった。

お前も聞いただろう。漁をするにはとてもいい季節なのに、まるで魚たちがみんなどこかに引越しをしてしまったように、どの漁場を覗いても空き家ばかりだ。残されたワカメだけがゆらゆらと揺れている。水揚げはもうすっかりだ。

人魚 それはわたしが海にいないからだ。わたしをここに連れてきてからのことだろう。魚たちはわたしがいるところに集まってくる。お前たちは自分の首を自分でしめているんだ。

男 あの女も同じことを言っていた。

妹 占い師！

男 漁師たちはもっと沖の方に出なくちゃいけないようになったが……

人魚 海の流れが、この辺りとは違うからな。渦だつてたくさんある。

せいぜい気をつけることだ。

男 どのみち村の危機は終わらない。別の手立てを考えなければな。村を支えるには金があるんだ。そのくらいは分かるだろう？ それでこいつだ。自業自得というやつだ。お前が漁師を食ったりするからこうなる。

人魚 勝手に近づいて来たのはあいつらだ。わたしはただ食事をしただ

けに過ぎない。

兄 それで商売なのか。

男 俺は初めて見たが、いい商売になりそうだ。

人魚 余計なことを考える暇があつたら、早くわたしを海に戻すことだ。

後悔するぞ。

男 俺を選んだ長老たちの判断は正しい。この村では俺くらいしかいないからな。魚を獲るだけじゃない、それを売ってはじめて意味があるということをもっとも理解している人間だ。

人魚 死ぬ。

兄 それはそれとして、どういうことだ。妹には近づくなど言っただろ

う。(妹に) お前にも言った。

妹 兄さん、ちよつと。(と引張る)

兄 妹は男から少し離れたところへ移動した。

兄 (妹に) なんだお前、香水をつけてるのか。

妹 ……。

兄 お母さんの香水じゃないか。

妹 いいでしょ使っても。

兄 化粧もしてる。その格好も！ 何度言えば分かる。あいつはダメだ。

妹 兄さん、わたしはもう言い争うつもりはないの。彼の魅力を見さんにも早く分かってもらいたいと思ってる。けど、それまでのあいだ何もしないで待っているわけにもいかないの。わたしにはわたしの毎日がある。彼との時間を大切にね、したいのよ。

兄 あいつの魅力つてなんだ。そんなの長続きするわけがない。お前にはやるべきことがたくさんあるはずだろう。

妹 まただわ。いつも同じことばかり！ わたしはいつもやるべき仕事をしているでしょ。怠けたことがある？ 一日のなかで一度だけ、少しのあいだよ。ひと目彼と会う時間をどうして許してくれないの。

人魚 その香水をわたしにもよこせ。蠅が増えてきているんだ。

妹 だから。香水では臭いは消えない。それに海に入れば落ちてしま
うじゃない。

人魚 だったらまたふればいい。海から上がったときに。

兄 とにかく香水なんかつけてあいつのところに行くのはダメだ。

妹 香水がダメだって言うの？ お母さんの使ったから？

兄 そうじゃない。どのみちダメだと言っている。

人魚 だったらわたしに使わせろ。(兄に)お前からも言え。

妹は香水を人魚の顔にふりかける。悲鳴をあげる人魚。

妹 いったい彼のどこに不満があるの。

兄 遊び人じゃないか。フラフラして女を見つけてはすぐに言い寄る。

妹 お前だけじゃないんだ。あいつはそういう男だ。

妹 そんなことはない。彼はお父さんを海で亡くしたでしょ、だからこ
れからは自分が家族のために漁に出るって言ってるの。

兄 商売をしているじゃないか。

妹 漁に出ることも必要だって。(男に) そうよね、漁にも出るのよね。

男 父の遺志を受け継ぎたいと思ってるね。

兄 嘘だ！

妹 嘘じゃない。

兄 泳ぎができないやつに漁はさせられない。村の掟だ。

妹 兄さんだって泳げないじゃない。

兄 だから俺は船大工をやっている。

妹 やってないでしょ。兄さんこそ毎日フラフラしている。

兄 それは仕事が無くなったからだ。

妹 今日はどこに行ってたの。

兄 ……。

妹 あの人が立派だわ。

兄 いいか、あの年になって泳げるようになれるわけないだろう。考え
てもみる。

妹 泳げるようになる。

兄 ならない。

妹 なるわよ。

兄 いい加減にしろ！

妹 どうして怒鳴るの？

兄 ……すまん。

妹 泳ぎの練習だって毎日してるんだから！

兄 おいっ。

泣きながら妹は出て行った。

人魚は香水のかかった自分を匂っている。

人魚 どうだ。お前が傷口に塗りたくった変な臭いもしなくなった。さ
わやかな、いい匂いだ。たしかに海にはない匂いだな。

兄 満足か。

人魚 これが母親の匂いなのか。こんな匂いがする女がここには住ん
でいたのだな。海には海の匂いがある。ここはそういうものがないと
思っていたが、もともとはこの匂いがある場所だったのか。その女は
どこへ行った？ 死んだのか。わたしは食った覚えがない。

兄 お前には関係のないことだ。

男 また来る。

兄 泳ぎの練習だと。

男 なんだ。

兄 今さら漁師になるつもりか。

男 泳ぎは健康にもいいんだ。

兄 もう来るな。

男 そうはいかない。長老たちからの依頼もあるし、妹さんの内職のこ
とだってある。

兄 ……。

男 お前もちゃんと働け。仕事が無いからって妹の内職に頼ったままで人
魚

いいのか。

人魚 (男に) お前はお前で死ぬ。

男は去る。

人魚 おい、それよりも水だ。

兄 なんだ。

人魚 わたしを水のなかに入れてくれ。最近体が乾いていつてるんだ。

兄 ダメだ。

人魚 どうしてだ。

兄 お前はそのヒレで水をバシバシやして、家の中に撒き散らす。何
度水を入れても同じこと。すぐにバシバシややって、空になつてし
まうじゃないか。俺たちは部屋の掃除に追われることになる。ただの
水ならまだしも、塩水だからな。大変なんだ。

人魚 バシバシやしない。わたしはもう水をバシバシやしたりしな
い。

兄 それは無理だろう。

人魚 どうしてだ。誓ってもいい。

兄 見てみる。お前のヒレは水がなくても絶えずバシバシやしたがっ
ている。動き続けているじゃないか。魚としてのお前は絶えずバシバ
シやしたがっているということだ。

沈黙。

兄 明日から海で泳ぐ時間を少し延ばしてやる。それでなんとか我慢し
てくれ。

人魚 なんてひどい扱いなんだ。

兄 俺たちだって好きでしているわけじゃない。

人魚 嘘をつけ。お前たちは好きでこうしてやっている。わたしが凶暴
だから、お前たちには理解できないものだから、こんな仕打ちをする

んだ。わたしにこのヒレがなければどうだ。このうろこがなければど
うだ。同じことをお前たちはしたか。

兄 お前にはヒレもあるし、うろこもある。

人魚 そうだ。

兄 なんだ。

人魚 わたしをどこかに行ってしまったお前たちの母親だと思って、そ
の生まれ変わりだと思って、丁重にもてなすということはどうだ。

兄 「どうだ」とはなんだ。

人魚 わたしを見る。

兄 ……

人魚 もつとよく見る。その女の面影が残っているだろう。ほら！ こ
の瞳、耳の形、唇。首から肩の線、この手。

兄 ……

人魚 どうだ。その大切な女は歌うことを強いられている。さあ、お前
の出番ではないか。わたしを守って、海に戻してやれと村のじじい
どもを説得して来い。

兄 ……お前が何を言っているのかさっぱり分からない。お前はわたし
の母ではないし、生まれ変わりでもない。

人魚 それはお前がよく見ていないからだ。

兄 よく見てなにご変わるといふんだ。お前はただの人魚でしかない。

人魚 ……

兄 薬を飲んで、喉を良くするんだ。とりあえずはそこからだ。

人魚 あ。

兄 なんだ。

人魚 だったらお前のもう一人の妹だ。年齢から言ってもそうだな。あ
の生意気な妹の姉ということを手を打ってやる。そうだ、わたしはお
前たちが死んだと思っていた、お前の妹だ。海に流れてそのままにな
っていたと思っていただろう。しかしその子は生きていた。このわた
しだ。お前のもう一人の妹。あるいはその生まれ変わりでもいい。ど
うだ。

兄 「どうだ」とはなんだ。

人魚 わたしを見る。

兄 ……。

人魚 もつとよく見る。その妹の面影が残っているだろう。ほら！この瞳、耳の形、唇。首から肩の線、この手。

兄 ……。

人魚 どうだ。その大切な妹は歌うことを強いられている。さあ、お前の出番ではないか。わたしを守って、海に戻してやれと村のじじいどもを説得して来い。

沈黙。

兄 どのいつもこいつも、なにもかもだ！

人魚 なんだ。

兄 とにかくだ。お前には歌ってもらわないと困る。そうすれば、このなんともならないあれこれが、少しは前にも進むというものだ。

人魚 それからわたしはどうなる。

兄 その後のことは知らない。

人魚 なんて身勝手な奴だ。

兄 今のこの家が、この状況がなんとかなれば俺はいい。

人魚 お前は聞いてみたいか。

兄 は。

人魚 わたしが歌うなら聞いてみたいと思うか。

兄 ……。

人魚 誰が歌うか。歌いようもない。

沈黙。

人魚 おい日が暮れてきたぞ。

兄 分かっている。

人魚 早く海へ連れて行け。

兄 分かっている。

人魚 泳ぎの時間を延ばしてやると言ったな。今日からだ。

兄 明日からだといったはずだ。

人魚 今日からだ。

兄 明日だ。

人魚 今日だ！

兄 ……いいだろう。

人魚 それでは連れて行け。

兄は人魚を見る。

人魚 なんだ。

兄 お前のそのおしゃべりが問題なんじゃないか。少し黙っていてはどうかだ。喉も休まる。

人魚 歌を奪われてわたしの喉はもうことばを出すほかなくなったのだ。

兄 それもわたしたちのせいだと言うのだろう。

人魚 そうだ。

兄 忙しい喉だな。

人魚 しっしっ！ 蠅がなんだかまた増えてきた。どういうことだ。

兄 蠅には香水も関係ないということだ。

人魚 うっとうしい！

兄は人魚を海へ連れて行った。

それから数日が経った。人魚は遊泳の時間で部屋にはいないが、室内から人魚の首にかかった綱が戸外へ伸びている。室内の綱は妹が座っている椅子の足に結ばれている。

部屋には妹が内職に勤しんでいる。しばらくして占い師が小さなカバンを持ってやってきた。

占い師 わたしはいつものように浜を歩いていったの。すると、この家から出てきた綱が浜を横切って海にまっすぐ伸びているのが見えた。

妹 あら占い師さん！

占い師 すぐに何事かは分かったわ。浜辺にはあなたの兄さんの姿があった。けれども海を見ても人魚の姿はない。綱は吸い込まれるように海の中へ消えていた。

妹 魚だから。

占い師 子どもたちは何度ダメだと注意されても、人魚を見ようと浜に集まる。あなたの兄さんが大きな声で注意をすると一目散に散っていくが、またしばらくすると戻ってくる。まるでこの…：…蠅のよう。

妹 うちの兄ったら、船大工の仕事がほとんど無くなってもブラブラしているだけ。なんとかなるっていつも言うけど、それ、わたしがこうして働いているからなのよね。

占い師 人魚の世話でお金も入るんでしょ。

妹 まだ貰ったことはないの。

占い師 その世話もあなたがほとんどしているってことね。

妹 そうなの！ 兄さんは一日一回人魚を海に連れて行くだけ。それも一時間くらいのことよ。どうしてそれでいいって思えるのかしら。わたしにはさっぱり分からない。

占い師 あなたがしっかりしているからよ。甘えてるのね。

妹 兄さんが結婚して子どもをつくって、家庭を持てば変わる気がする。

占い師 けど恋人いないでしょ。

妹 噂すらない！

占い師 結婚してほしいの？

妹 だってもうあの年ですもの。わたしもだけど。

占い師 家庭を持って変わるには限らないわよ。

妹 仕事があるときは真面目にやっていたのよ。今の兄さんは仕事がないから。変わると言うか元に戻ると言うか、そういうきっかけがありさえすればいいと思うの。

占い師 兄さんのことが大切なのね。

妹 ただ一人の肉親だから、やはりいろいろ考えるわ。それにもう嫌なもの。こんな仕事で二人分の生活を支えるのは。

占い師は小さなカバンを開けて中の物を出し始める。

妹 なに。

占い師 あなた占って欲しいって言ったでしょ。だから来たのよ。

妹 ああ…：…

占い師 あの男と付き合っているんだって、わたし少し驚いた。

妹 どうして。

占い師 あなたには…：…もうちょっと違う雰囲気の方が似合うかと思っ

妹 あなたも反対なの？

占い師 反対はしないわ。あなたの人生ですもの。

妹 そう。

占い師 どうして好きになったの？

妹 分からない。なにかに引きつけられるっていうか、吸い寄せられていく感じがするの。いつもいつもいつもあの人のことを考えてしまう。

綱が引つ張られ、妹が座っている椅子が動き出す。

占い師 危ない。

妹 ちよっと押さえて。

占い師が加勢して妹の椅子は止まった。

占い師 すごい力。

妹 こうして急に引っ張るときというのはね、泳いでいるうちに自分の首に綱があることを忘れてしまうのよ。思いつきり動くものだから。

占い師 苦しいでしょうね。

妹 それでまた喉を痛めたと文句を言う。

占い師 それが彼女の本能というもの。どこまでも泳いで行こうとするのも、岩場が上がって歌うのも。

妹 フラフラとやってきた男を食べてしまうのもね。

占い師 美しいものにはひきつけられてしまうものよ。人魚の歌はただの歌ではない。あんな美しい声を男たちは聞いたことがなかった。

妹 あなたも聞いたのね。

占い師 かすかに、けれども確かにね。美しさに触れる体験をこの村の男たちはしたことがなかったからなおのこと、人魚の歌に誘われてしまったのよ。

妹 まるで人魚の声に恋をしたみたい。

占い師 それで食われることさえなければ何の問題もなかったのに。

妹は綱に耳を当てている。

占い師 なにをしてるの。

妹 海にいる彼女の声が聞こえてくるんじゃないかしら。海にいれば彼女の喉も調子がよくなる。綱は彼女の首にまかれているのよ。だから声を出せばもしかするとここを伝ってくるかもしれない。岩場が上がらないと歌わないと言っていたけれど、海の中でも鼻歌くらいは……。

占い師 聞こえる？

占い師が綱を持ってあげると、綱は海の方に向かって張られた。

妹 そんなに魅力のある歌声っていったいなんなのかしら。

占い師 聞こえる？

妹は綱の中に声を探すが、ほどなく綱は緩んで床に落ちた。

妹 耳にチクチクして痛いだけ。

占い師 失われた歌声が戻ってくるのはそうたやすいことじゃない。

妹 わたしにも歌えるかしら。

占い師 人魚の歌は人魚だけのものよ。

妹 けど隣の奥さんだって歌は上手だわ。

占い師 自分でそう言っているだけでしょ。

妹 歌が上手ければどう？ あの人わたしにもっと花を摘んできてくれるかしら。

占い師 蠅ばかりが寄ってくる。(蠅を払って)しっしっ！ いったうに減らない。

妹 そうね、わたしはあの人だけがいい。自分の歌声で余計な者まで近づいてくるとすれば、それはかえって面倒な話だわ。

占い師 人魚にたかっている蠅だからここにいななければいなくなるのかと思っただけじゃない。こいつらは……また戻ってくることを知っているのね。それを待っている。蠅も彼女にひかれているのよ。

妹 ああ、うっとうしい！

男が現れた。

妹 あ。

男 できた？

妹 もう少し。

男 (怒鳴って)全然じゃないか！ おい、いつまで待たせるつもりだ。人魚

妹 ごめんなさい。

男 謝れっていう話じゃない。いいか、仕事というのには何にでも、そう何にでもだ。期限というのがある。おい、これの期限はいつまでだと俺は言った？

妹 二日前の晩。

男 二日も何してるんだ！

妹 ごめんなさい。

男 いいか謝るな。謝られると余計にイライラする。

妹 うん。

男 どうして二日もかかる。二日というより、まだ終わらないだろこれ。

妹 人魚の世話が。

男 そんなこと分かっている話だろ！ はじめから。え？ 違うか？

妹 うん。

男 人魚だって一日中起きてるわけじゃない。人魚が寝れば、やれるじゃないか。やれるだろ？

占い師 人魚の世話は大変なのよ。人魚が寝るころには、この子も疲れ果てている。

男 俺はこいつと話している。

妹 やろうとするんだけど……

男 うん？

妹 やろうとするんだけど、

男 やろうとするんだけど何だ。

嗚咽でことばにならない妹に男はカッとなって胸倉をつかむ。

占い師 ちょっと！

男 (呼吸を落ち着かせ妹を離す) ……やろうとするけど、寝てしまうのか。

妹 ごめんなさい。

男 足に針を刺せ。寝ないで済む。

妹 うん。

男 いいかおい。いいか、いいか、いいか！ 仕事っていうのは信頼関係なんだ。俺とお前との信頼関係、俺と取引先との信頼関係。おい、取引先はお前のことなんか知らない。そうだろ？ 俺に仕事を依頼してるんだから。じゃあ仕事が遅れたらどうなる。俺がいい加減な奴だと思われる。信頼を失って、俺に仕事は来なくなる。そしてお前もだ！ 分かるか、みんなつながってるんだ。

妹 うん。

男 人魚の世が大変で仕事ができないと言うなら、はじめから受けな

きやいいんだ。断れよ！ そういうことを言うなら、え？ 断れ！

妹 ごめんなさい……うん。

男 もういい。さつさとやれ。さつさとだ。

沈黙。占い師は占いの道具を片づけ始める。

占い師 またにしようか。

妹 ごめんね。

占い師 頑張りなさい。

男 そうだ。占い師さん。

占い師 なに。

男 人魚のことが決まったよ。

占い師 なにが。

男 町に移すことになった。

占い師 町に。

男 町のサーカス団と契約することになった。俺がまとめた話だがね。こんなところに置いてても仕方ないだろ。金になるわけでもないし、兄

妹もずいぶん迷惑をしている。この子の内職が進まないのも人魚が原因なんだし……そうだ！ (妹に) お前にとってはとても喜ばしい報

せだ。

妹 サーカス？

男 世界中から猛獣を集めて芸をさせている。

妹 彼女はそこに行くのね。

男 ああ。

妹 本当に？

男 本当だ。

二人は抱き合う。

妹 やっと元の生活に戻れる。

占い師 それはいつ決まったの？ わたしは聞いていない。

男 さっき俺が長老たちに報告してきたところだ。

占い師 どうやって町まで運ぶの。運べないでしょ。

男 いま大きな水槽を作らせている。

占い師 水槽？

男 でっかい水槽だ。あの人魚がすっぽり入ってしまう大きさで、もち

ろんヒレで割ってしまうこともない、分厚いのを。

妹 ウフフ。

男 それを船で町の港まで運ぶことにした。

占い師 一日一回は海で泳がせないといけないのよ。それでも少ないと

言っているくらいなのに。

男 海の水を持っていく。毎日水は入れ替えて、ここにいるよりましに

なるだろう？ ここだと干からびていく一方だ。水槽の中にいれば一

日中水の中にいられる。あいつがどちらを選ぶかは明らかだろう。

占い師 そんなはずない。

男 もう決まったんだ。長老たちの了承も得た。あんたが何を言ったと

ころでもう決定は覆らない。

妹 ウフフ。

男 大きな商談だった！ 俺もいろんな取引をしていたがな、ここまで

のものは初めてだ。なに心配するな、貸すだけだ。そのあいだ俺たち

はサーカス団から貸し賃をもらうことになる。

妹 ウフフフフ。

占い師 そんなこととしては絶対にいけない。この世界ではやっていいこ
とと悪いことがある。

占い師は出て行った。

男 なんだ泣いているのか。

妹 嬉しくてつい。

男 嬉しくて泣いているのか。

妹 わたしはずっと待たされ続けてきたの。一日だけだと言われて彼女

を預かった。けれども二日三日と過ぎて、いつまでと言われることも

なくなってしまった。ねえ、終わりが分からずに待ち続けるのって本

当に辛いことなのよ。けれどもあなたが、その終わりを知らせてくれ

た。わたしにとっては神様みたいな人！ だって誰にもそれがいつ終

わるのか言えなかったんですもの。

男 さっきは大きな声を出して悪かった。

妹 ううん。

男 仕事は仕事だからな。お前のことがどんなに好きでも、

妹 それとこれとは別なんですよ。

男 何事にも一生懸命でいたいんだよ、俺は。

妹 分かっている。わたしが悪いの。

男 お前にはいい仕事を持ってきてるんだ。手先が器用だからな。分か

るだろ、俺がどれだけお前のことを信じているか。

妹 分かっている。

妹 は作業を始めるが、男は妹を押し倒した。

妹 ちよつと！

男 ……

妹 仕事しないと。

妹 ……

男 ……。
妹 イヤっ！

そこへ兄が人魚を連れて戻ってくる。

兄 (男と妹を見て) なにをしてるんだ。

妹 お帰り、兄さん。

人魚 水を持ってこい。

妹は水を取りに行く。

兄 なんだお前は。

男 お前の妹が仕事の納期を守らなかったんだ。おかげで俺まで信用を失いつつある。それで催促に来た。

兄 無理な仕事を押し付けるな。分かるだろ、こいつの世話がどれくらい大変なのか。

男 どうして俺が非難されなくちゃいけない。あの子はお前の分まで働いているんだ。

人魚 お前らうるさい。静かにしろ。

兄 用が済んだなら帰ってくれ。

男 (人魚に) 調子はどうだ。

兄 話しかけるな。

男 なんだ。

人魚 また激しく打たれたんだ。お前はわたしの世話役なんだろう。大切なこの体があざだらけになっている。気持ちよく泳いでいただけなのに。

兄 泳いでいただけだと！
男 どこを打たれた。
人魚 背中だ。

人魚は男に背中の中の打たれたところを見せる。

男 これはひどい。

人魚 まるで牛や馬と同じだ。

妹 (水を持って戻って人魚に渡して) ……兄さん。彼女のこと聞いた？

兄 これ以上、何を聞いても驚かない。

妹 町に移されるの！ (男に) ね！

兄 町に？

妹 やつとここを出ていくの、元の生活に戻れるの。

兄 本当か。

男 本当だ。

人魚 そんな話聞いてない！

妹 わたし、もっと働くわ。働くことって自由を奪う足かせのようなものだとずっと思っていた。生活に必要なお金を得るために、わたしの時間と労力を誰かに差し出すの。だからどうやって少ない時間と労力で、より多くのお金を手にするかということだけをいつも考えてしまう。わたし自身をどれだけ犠牲にするのかっていうこと！ いつも犠牲が少ないことが喜びなの。けど違うのよね。働いて本当はわたしの未来を切り開くことなのよね。生活のお金は必要だけれどそのためだけじゃない…こんな言い方をしたら兄さんに怒られるかしら……けどわたしはもう誰の奴隷でもない。これからはきつとそうなる。そうとしか思えないのよ。

男 人魚の世話をしないだけ自由になる。たくさんいい仕事を持ってくるよ。

妹 ほら！ ね！ 兄さん。未来が開けていく。

兄 よかった…よかった…何ごとにも時機というものがあるもんだ。この最悪の日にそんな朗報が待っていたとは！

妹 最悪だなんて、こんなに気持ちのいい日が今までにあった？
兄 ……子どもが殺されたんだ。
妹 え。

兄 あいつが殺した。ついさっきのことだ。
人魚 殺したんじゃない。食っただけだ。

沈黙。

妹 子どもが？ 海で？ だって彼女が泳いでいるあいだは、誰も海に入ってはいけないことになっている！

兄 こっそり海に入ったんだ。何人かの子どもが……あれだけ言われていたのに。

妹 殺されたのは？

兄 一人だ。

人魚 いつものように魚を探しながら泳いでいた。そうしたら覚えのあるにおいが海の中を漂ってくる。よくその窓から覗いていたガキどもだった。警告はしていたからな。

妹 分かっているならどうして？

人魚 腹が減っていて食い物が目の前にあって、どうしても食べない理由がある。生きるためには食べなければ。お前たちだってそうだろう？

妹 どの子ども？

兄 隣の、あの真ん中の男の子だ。

妹 ひどい！

人魚 ひどいのはこいつらだ。はじめの食事がそのガキで、さあ今からっていうときに引き上げられたんだ。中途半端に食ったから、余計に腹が減ってしまった。おい世話役！ 腹が減っては歌うどころじゃないぞ。お前から言ってもう一度海に連れて行かせろ。

男 確かにそうだ。子どもを陸に戻せば、あとはいつもどおりでいいだろう。

兄 そういうことじゃない。

男 お前は何も分かっているじゃない。おい、健康管理がもっとも大切なんだ。しっかり食べて調子よくなってもらわないと困る。

兄 じゃあお前が連れていけ。世話役なんだろ。

人魚 さあ行こう。

占い師が入ってくる。

占い師 あつという間に村は静かになった。どこからも人の話し声は聞

こえない。みな家の中にいてその戸は固く閉じられている。人魚への恐れと憎しみがみなを口を閉ざしているのよ。それはもう村全体を覆っている。潮風が吹いてヒューヒューとなる。ぼろ家がギンギンと音を立てる。波は風に遠慮して静かなままだ。ほら見て。日が落ちる。

妹 子どもが殺されたんですってね。

占い師 そう。

妹 けど彼女はもうすぐこの村を出るんだから。これが最後の不幸でしょ？

人魚 わたしは聞いていない！

占い師 それは分からない。とにかく今から弔いの準備。村の女はみんな隣の家に集まっているわ。あなたも行きなさい。

妹 今から？

占い師 夜通し交代で弔いの準備をするの。たくさん料理を作ってね。弔問客も来るでしょ？ 今日と明日は大変よ。

妹 けど仕事が……

占い師 みんな仕事を置いて駆けつけてるの。あなたも行かないと。

妹 (男を見る)

男 仕方ないだろ。

妹 兄さん、行ってくる。(と去る)

沈黙。

占い師 あんたたちも早く行きなさい。まずは松明の用意をしなくちゃ。

男 俺はこいつの世話がある。

占い師 弔いの方が先でしょ。

男 俺は例外だ。

占い師 例外なんてない。

男 俺は長老たちから直々にこいつの世話をしよう言われているんだ。

こいつの側には誰かがいつもついていないといけない。

兄 俺は罰せられるんだろうか。

占い師 あんたが悪いわけじゃない。だつて気が付かなかったんでしょ。

兄 この罪も俺のものになる気がしてならない。なんだか生きていくだけである罪を負わされているような、後ろめたさをずっと感じる毎日だ。仕事が無くなったのも俺のせいじゃないのに、なんだかその罪は俺にあるように思われる。

占い師 人魚のせいでしょ。

人魚 (振り返って) 呼んだか？

兄 あいつを捕まえてここに置くのも、俺の罪であるような。

占い師 気にしすぎよ。

兄 俺はあの家族に謝るべきだろうか。

占い師 謝らなくていい。どうしようもなかったんだと、はっきり言え。ばいばいのよ。ちゃんとお悔みを言っただけ、問われることがあつたらそう応えるの。

兄は出て行った。

人魚 いちいち大げさなんだ。お前たちだつて子どもの魚を食うだろ。

魚は子どもを食われても弔いなんかしないぞ。

占い師 わたしたちはするのよ。

人魚 カネを稼ぐとか、弔いをするとか、忙しいな。

沈黙。占い師は男を見る。

男 なんだ。あんたも弔いになくちやいけないらんか？

占い師 ここに置いておくだけでこんな不幸が起きるのよ。町に連れて

いけばどうなるかも分からない。

人魚 とんでもないことになるぞ。

男 大丈夫だ。サーカスの連中はこういうのに慣れている。

人魚 歌わないぞわたしは。

男 上手に調教するさ。

占い師 そういうことじゃない。

男 今さら海に戻せというのか！ 何もなかったことにしろと？ 馬鹿げている。もうすでにこいつのために多くの労力と金が費やされているんだ。おまけに犠牲者も出た。

人魚 海に戻せ。それがお前らのためだ。

男 諦める。次の人生を考えろ。

人魚 わたしは人じゃないんだ。人生なんてない。

占い師 わたしは絶対に反対。
男 長老たちに言え。弔いにも来るだろう。もつとも計画が早くなることはあつても、海に戻すことにはならない。もう町のサーカスとは契約している。契約書を見るか？ ここにある。

占い師は出て行った。

人魚 そのケイヤクシヨを見せろ。

男 お前は字を読めないだろ。見ても仕方がない。

人魚 わたしに関わることだろ。いいから見せろ。

男は人魚に契約書を渡す。そしてその隣に横たわった。

人魚 なんだ。

男 これからのことを話しておかないといけない。

人魚 どうして着てるものを脱ぐ。

男 ついでだ。

人魚はそれを破ってしまう。

男 破ってしまったばなかつたことになるけども思ったか。

人魚 ……。

男 契約っていうのはそういうことじゃないんだ。

人魚 海に連れていけ。腹が減った。

男 そうだな。

男は起き上がらない。

人魚 ……町には行かない。

男 心配するな。ずっと俺がいる。

人魚 お前がいるとかいないとかの話じゃない。

男は何か囁いた。

人魚 え、なに？

男は人魚の耳元でなにかを囁き始める。人魚はそれを静かに聞いている。男の囁き声に加えて、戸外から集まる人の声も聞こえてくる。

松明の明かりが射してきた。

人魚 なんだあの明かりは。

男 松明だ。

人魚 松明？

男 吊いの儀式をするときに家の前に置く。二本の松明が門の前にあつて、生きた人間が出入りする。魂もそこを通って海へ行く。

人魚 海へ。

二人は抱き合う。
戸外からは村の人々の泣き叫ぶ声も聞こえてくる。

その後、兄が帰宅すると人魚の周りは血まみれになっていた。男は人魚に食われて無残な姿で、兄は誰にも知らせずにその死体を海に捨てた。

舞台にはタバコを吸う人魚と兄。兄は床の掃除をしている。やがて占い師が入ってくる。

占い師 臭いがすごい。蠅もさらに増えている。

兄 なかなか取れないんだ。

占い師 妹は？

兄 海へ行った。

占い師 あの子は辛いでしょね。

兄 そうだな。

占い師 村の人間には知られていない。長老たちだけに伝えてあるわ。

あなたが騒ぎ出さなくて助かった。子どもの弔いをしている真っ最中にさらに死人が出たと分かれば村の混乱はもう予想がつかない。

兄 この家にこれ以上誰も入ってきて欲しくなかったんだ。

占い師 どうして殺したの。町へ売ろうとされたから？

人魚 あの男か。

占い師 ええ。

人魚 何度も言うが、わたしは誰かを殺すなんてことをしない。

占い師 食べたただけだっていうんでしょ。

人魚 食べるつもりはもとよとなかった。そんなに美味そうでもないからな。ただ、あの男があまりに近くに來た。

占い師 どうして。

人魚 分からない……とにかく男は着ている物を脱いで、網の中に入ってきた。

占い師 は。

人魚 ベトベトした手でわたしを触る。顔から手から胸も腹も尻も、足の先まで。そして同じところを舐めていく。とてもゆっくりで、わた

しは気持ち悪くて、何してるんだと聞くが、男は何も言わないまま夢中になっている。やっと終わったかと思ったら、今度は腰の下におつ立たものをわたしの体に押し付けてくる。人間の女にはよくするらしいな。ところが人魚のわたしとはどうしていいのかわからないらしく動きが止まって、こんなのは初めてだと男は言った。お前たちはどうしているんだと聞かれたけれどわたしだって知りはない。なにがしたいんだと聞くと入れたいんだと男は言う。どこに入れていいかわからなくて、イライラしていた。イライラするくらいならやめればいいとわたしが言うと、あの男は怒った。どうしてそこで怒るのかも分からない。分かるか？ そして男は強引にわたしの体にある穴という穴すべてにモノを入れ始めた。からまる網もお構いなしに入れたり出したりしながら、そのうちになにかの液をわたしの体の中に出す。

占い師 ひどい。

人魚 耳と鼻は違うと分かるらしい。それ以外の穴は全部やられた。忙しい男だ。気持ちいい気持ちいいと男はわたしの耳元で囁き続けて、お前はどうかと男は聞くが、わたしはなんのこともだかさっぱりで。

とても腹が減っていたからそう答えた。男はだったら俺を食うかと笑いながら言って、その瞬間になぜか声を上げてのけぞった。わたしの目の前で……男の首筋がすつと伸びて……食うつもりはなかったんだがな、わたしはそこに食いついたらしい。

占い師 らしい？

人魚 よく覚えてない。食い始めて我を忘れた。

占い師 自業自得というべきかしら。あなたもひどい目にあった。

人魚 わたしは腹は満たされたからな。美味しい不味いは別として。

兄 おい。

人魚 なんだ。

兄 その話は妹にはしないでくれ。

人魚 どうして。

兄 分からないか……そんなの当然じゃないか。

人魚 なにが当然なんだ。

占い師 理由を話すと長くなる。

人魚 聞かれなければ話すことはない。

兄 聞かれてもだ。

人魚 ……。

兄 どうなるんだこれから。

占い師 契約はもう済んでいるということでしょう？

兄 これ以上の災いは本当にごめんだ。あんたの占いはどうなんだ。ま

だこれからもこういうことが続くのか。

占い師 もちろんね。

人魚 おい。

兄 なんだ。

人魚 わたしはもう寝る。静かにしろ。

人魚は寝た。

兄 長老たちはそれで構わないのか。

占い師 長老たちは子どもが死んだことを事故だと言うの。災いではな

く事故だと。

兄 事故？

占い師 決まりを破ったり不注意で起こったということ。だからきちん

とすれば防げるのだと。

兄 そうなのか。

占い師 長老たちはもはやわたしの占いには耳を傾けなくなってわ

兄 占いの助言なしにどうやって物事を決める。

占い師 目に見えぬものや聞こえないものよりも、目に見えて手につか

むことのできるものが基準になりつつあるみたい。雲の流れや星の動

きに思いをめぐらし、わたしたちの手の手の及ばないことに敬意を払う、

そういうことではないということね。

兄 あなたのことはもう彼らに響かないということか。

占い師は静かに去る。

兄 (蠅を追い払って)まったくうつとうしい蠅だ。早くどこかへ行ってしまえ。しっしっ！ ここにいてもなにも満たされないぞ。いつまでわたしたちにまとわりつくんだ。しっしっ！

兄は蠅を追い払おうと手を振り回している。見える蠅も見えない。蠅も区別なく追い払おうと必死になっている。

そのまま時間が経って朝が近くなる。妹が戻ってきた。

妹 兄さん。

兄は我に返る。いたはずの蠅も消えている。

兄 ……。

妹 わたしはなにもかも失ってしまった。ねえ、わたしはあの崖から彼を追いかけてようと思ったのよ。運ばれていく彼の死体から血が点々と砂の上に落ちていく。それをたどってね、ここから彼が捨てられたあの崖までずっと。血の点が途絶えた場所にわたしずっと立っていた。ねえ、彼はあそこでわたしのために花を摘んでくれたの。この花。どこに咲いていたのかと崖の上から覗き込んでみても真っ暗で何も見えない。吹き上げてくる潮風がわたしを押し返して、それでわたしはハッとすの。それがなければわたし、そのまま吸い込まれていたかもしれない。確かにそう、崖の下からわたしを呼びかける彼の声が聞こえる気がした。

兄 そんなバカなことがあるわけじゃないか。

妹 分かっている。

兄 こういうときこそ気を確かにもたなければ。

妹 その崖から先へ行くのがわたしの進む道ではないのは分かったわ。けどね、だからといってどこに行けばいいのかも分からない。この家

に戻ってきたのは、崖の先ではない方角にあるのがこっぴかないから。

沈黙。

兄 もうすぐ朝だ。弔いの準備は休んだらいい。隣の奥さんには俺から
言っておくよ。

妹 兄さんは彼が死んだことを雷に打たれたようなものだと言ったけど
とてもそうは思えない。だってあんなに饒舌な雷があるかしら。

兄 十分に注意するしかない。そうすれば避けられる事故だ。
妹 事故？

兄 あいつは油断したんだ。人魚は人魚だ。ただの女じゃない。
妹 みんな彼が悪いというの？ 彼が殺されたのも自分の過ちなのか？

兄 いつもそのことは注意されていたはずだ。
妹 兄さんはどうして彼女の味方をするの？ 殺したのは彼女なのよ。

兄 味方をしているわけじゃない。お前を慰めようとしたんだ。雷に当
たったようなものだと考えるほかないだろう。

妹 まるで彼女の弁護士ね。
兄 弁護士だなんて会ったこともないよ。

妹 彼が殺されて良かったと思ってる？
兄 俺が？

妹 わたしたちのことにずっと反対してたでしょ。だからそうやって彼
女の味方をするんだわ。

兄 そうじゃない！
妹 村の人間が鯨に襲われたとしたら？ 村は総出で鯨を退治するでし
よう？ 実際にかつてあったという話だわ。

兄 彼女は鯨じゃないだろう。
妹 やったことは同じ。なにが違うというの。

兄 今日はこのあたりにしておこう。
妹 わたしにはもう凶暴な鯨でしかない。

兄 彼女を退治するというのか。

妹 じゃあどうするの。

沈黙。

兄 弔いの準備を手伝ってくる。お前のことも言っておくから。
妹 彼の弔いは？

兄 今日は無理だ。
妹 どうして。

兄 村のみんなが混乱する。
妹 そんなの関係ない。

兄 無茶を言うな。分かっていることだろ？
妹 ……

兄 先に休め。
妹 眠れない。眠れるはずがない。

兄 だったら…床の掃除でもしていればいい。
妹 掃除？

兄 血が取れないんだ。臭いもひどい。彼女が起きたらまた文句を言
ぞ。厄介だ。俺たちだって嫌だろ、このままじゃ。

妹 そうだった！ 彼女の家もここだったわね。忘れていた。そしてわ
たしは不自由な彼女の世話をまた今までのように続けるのね。

兄 代わりはいないからな。
妹 なんて残酷な話！

兄 は出て行った。隣の家では弔いの儀式が始まっている。
妹 は何かを考えている。そして戸外に走って行った。

数日が経った。花瓶にさされた花は無くなっている。部屋には人魚と妹がいる。

人魚 おおおつ、寒い。寒いといったららない。これくらいのを羽織ったところで、なんの役にも立ちやしない。もっと着込まないと体の調子がおかしくなってしまう。……風だ。風が入ってきてるんだ。

占い師 (現れて) 風が吹いているのよ。嵐が近い。

人魚 そんな季節ではないはずだ。

占い師 いつもならね。

人魚は激しい咳をして苦しんでいる。

人魚 ……近所のガキどもだ。

占い師 なに。

人魚 腐った魚をその窓から投げ込んだ。何匹も。わたしに餌を与えつもりだったのだろうが、わたしは死んだ魚を食べない。腐った魚など食べられるものか。嫌な臭いがいっぱいになってそれで気分が悪くなってしまった。その頃からだ。体の調子がひどくなったのは。

占い師 それでこの蠅の量なの。(と追い払う)

人魚 無駄だ。慣れるほうがいい。

妹 (水を汲んで) 水を飲みなさい。

人魚 体に力が入らない。手足の痺れが止まらない。

妹 水が足りないからよ。

妹は毒を混ぜた水を人魚に飲ませると近くに座った。

占い師 ……強い子ね。あんなに悲しいことがあったというのに、いつ

もどおりにあんたの世話を続けている。

人魚 それがこいつの仕事だからな。

占い師 あんたには罪悪感はないの。

人魚 ない。しかし人間の世界では謝罪ということをするのだろう。それにならって謝罪のことは言った。

占い師 どんな？

人魚 「悪かったな、お前の恋人を食ってしまった」

沈黙。

占い師 それだけ？

人魚 謝罪だ。

占い師 それでこの子はなんて言ったの？

人魚 なにも。

占い師 この子はいま自分の身に降りかかった不幸と向き合うことで必死なのよ。じつと耐えながら今までどおりの生活が続けることが大切なのだということをこの子は知っている。

人魚 お前のインチキ占いでこいつの将来を見てやれ。

占い師 もちろん。その前にわたしはあんたの話をしにきた……ああ、うっとうしい。

人魚 何度もわたしは言っている。海に戻せと。

占い師 それは難しい。

人魚 もはや歌うことを考えただけで咳がでる。この……(咳をする)これを「咳」と呼ぶことを知ったのもここにきてからだ。もはやわたしの気が変わったにしても、からだがついてこない。

占い師 村のなかにはあなたを殺せと騒ぐ人もいる。

人魚 ここは静かなものだ。蠅の音しか聞こえない。わたしを町に売るなら売ればいい。近くにいようが遠くにいようが、どちらにせよ海から離れていることに変わりはない。

占い師 泳ぎの時間はなくなるわね。

人魚 いやいよ干からびていくだけだ。そんなわたしに売り物としての価値があると思うか。

占い師 わたしにも水をもらえる？
妹 新しいのを持ってくるわ。

妹は水を取りに行った。

人魚 この世界にはいったい何匹の蠅がいるのだろう。こいつらは！
— たたき殺してもすぐにまた別の蠅がどこからともなくやってくる。殺しても殺してもまた現れる。

占い師 よほどあんたのことが好きなのね。

人魚 わたしのなにがいいというのだ。

占い師 蠅は匂いによってくる。あんたの匂いがなによりの魅力なんじゃない？

人魚 香水をふったのに。

占い師 それでさらに増えている！

人魚 蠅に好かれても嬉しくない。食えもしない！

占い師 もはや遠慮すべきはわたしたちかもしれない。

人魚 やつらのすみかになっているからな。

妹が水を持って来た。

占い師 大丈夫？

妹 ええ。

占い師 ずいぶんと悲しい思いをしたでしょう。

妹 確かにね、はじめは身動きできないほどだったけど、いつまでもじつとしてはいけないうらんだって思ったの。

占い師 たくましい。

妹 わたしはわたしのやるべきことをするの。

人魚と占い師は蠅を見ている。

人魚 わたしはどうなる。

占い師 あなたが食べた子どもの親に謝罪するの。心からの謝罪。その傲慢な態度を改めることから始めるしかない。

人魚 お前たちの態度を改めるのが先だ。

占い師 こんな難しいことは初めて！

人魚 わたしだってそうだ。占ってみてはどうだ。

占い師 もはや占いで、進むべき道は示せないでしょう。

人魚 (蠅を追い払って) 顔はやめる。顔は。

妹は再び毒を混ぜた水を人魚に飲ませようとする。

人魚 さつきも飲んだな。

妹 乾いているんですよ。

人魚 そうだ。最近の水を飲めば飲むほど、かえって乾いてくる。

妹 なにも遠慮することはないわ。

人魚 わたしがこの水を飲んで満足か。

妹 あなたが持って来いと言ったのよ。

妹は人魚に水を飲ませる。

人魚 (自分を見つめる妹に) なんだ。

妹 ……。

人魚 そうだ。あの香水をよこせ。

妹 どうして。

人魚 嫌な臭いにする。お前には匂わせる相手もないんだらう。

妹 あなたが殺したのよ。

人魚 だったら必要ないだらう。

妹 そうね。

人魚 ああ…ああ…。

風が強くなってきた。妹は香水を自分にふって人魚に渡した。

妹 使っていいわ。

人魚 全部は持っていない。必要になればまた言う。

妹 あなたが持つていなさい。いちいち持つて来いといわれるのも面倒なこと。

人魚 だったらいただいでおこう。

妹 寒いんだって言っていたわね。なにか毛布でも持つてきましようか。

人魚 いやいい。なんだか寒くなくなってきた。

妹 あ、そう。

人魚 お前の匂いがした。

妹 なに？

人魚 この匂いだ。あの男の首に食いついたときに。

妹 わたしの匂いが分かって、それでも殺したの？

人魚 腹が減っていることとは関係ないからな。

妹 関係ない？

人魚 お前に嫌がらせをしたいんじゃない。こればかりはどうしようもない。

妹 ……そうね。いまさら聞いても仕方のないことだったわ。

妹は出て行った。占い師も静かに去る。

人魚 ああ……ああ……。

人魚だけが部屋に残されたまま数時間が過ぎる。

人魚 ああ……ああ……。

兄が戻ってきた。外の風がさらに強まっている。

兄 なんだ一人か。

人魚 一人じゃない。

兄 ……どういことだ。

人魚 おい、よく見てみる。お前の目が確かならな。ここにいるのはまぎれもない、お前の妹だろう。暗がりのなかにじっと座ってこちらを見ているじゃないか。ずっと黙っているが確かに役目は果たしている。

兄 ……。

人魚 水を持つてきてくれないか。

兄 水か。

人魚 妹に言っているんだ。

兄 お前こそよく見るんだ。妹はどこへ行った。風も強くなってきたし、外はもう真っ暗なんだぞ。

人魚 ああ……ああ……。

兄 なんだ、もはやことばにもならないのか。その声は。

人魚 馬鹿にするな。わたしはこうしてまだしゃべっていられる。話をしないとときだけだ。喉を空気が通ると声が出てしまう。

兄 まるでうめき声のようだ。

人魚 わたしの喉が！ わたしの喉が欲しているのだ。わたしの意志とは関係なく震えたがっている。本来の役割を取り戻したいと。

兄 恐怖に怯えているのか。

人魚 それはお前たちだろう。（と激しく咳をする）

兄 だから薬を飲めと言ったのだ。素直になるということを覚えればこんなことにもならなかったのだ。

人魚 それはただの従属にすぎない。

兄 まったく人の言うことを聞かない！

人魚 ほら聞こえるだろ。

兄 なんだ。

人魚 風が壁の隙間から入ろうとして音を立てている。どこだ。

人魚 そのこだ。隙間があいているだろう。何度もふさげと言ったのに、結局そのままになっている。

兄 そんなことはない。きちんと穴はふさいだはずだ。

人魚 聞いてみる。風がこの汚い部屋を覗いて声を上げている。

兄は耳を澄ますが隙間風の音を聞くことができない。壁の隙間も見つけられない。

兄 ……

人魚 お前は目だけじゃない。耳も聞こえないのだな。

兄 お前がわたしたちよりも鋭いということだ。半分は獣なのだから。

人魚 違う。お前は見えていないし聞こえてもいない。

兄 分かった分かった。それではそういうことで構わない。

兄は水を取りにいった。

人魚 お前もわたしを憎むのか。

兄 なんだ。

人魚 村の連中はみんなそうなのだろう。妹にいたってはその憎しみははかりしれず、まるでこの嵐を呼び寄せるほどではないか。その憎悪のせいなのか、わたしの体がこのようになったのは。お前もわたしを憎むのか。殺したいと思うのか。

兄 お前を殺したところでなんにもならない。蠅がさらに集まるだけだ。

人魚 お前もしたいと思うのか。

兄 なんだ。

人魚 殺されるときに男がわたしにしたことだ。気持ちいいと何度も耳元で囁いていた。お前も同じ男だろう。

兄 俺はいい。

人魚 だったら歌はどうだ。

兄 歌？

人魚 聞こえるか。

兄 なにがだ。

人魚 わたしの声だ。わたしの口からダラダラと流れ出てくるこの声だ。兄 もちろんだ。お前の声は、わたしの記憶の中まで流れ込んでくる。

人魚 だったらわたしの側についていることだ。片時も離れずしっかりと。そして油断することなく耳を澄ませ。海に出て、あの岩場につけばお前の耳元でわたしは歌をささやこう。この声が確かに聞こえてくるんだ。だったらそのとき、わたしの歌声も聞こえるだろう。

兄 お前を海に出せというのか。今日は泳ぎに出せない。見れば分かるだろう。

人魚 いいかよく聞け。お前が船を出すんだ。わたしには泳ぐ体力がない。手足もしびれてダメだ。そしてわたしを捕まえたあの岩場へ行けと言っている。

兄 なんのために。

人魚 お前は聞いてみたいのだろう。わたしの歌を。わたしもお前に聞かせたい。

兄 食べるのか、わたしを。

人魚 それはそのときのことだ。しかしお前は どう見ても獲物ではない。

兄 ふふっ、じゃあなんだ。

人魚 わからない。

風の音。嵐の気配は強まっている。

兄 こんなときに海に出るとは。

人魚は震える手で香水を自分の身にふった。

兄 その香水はなんだ。

人魚 妹にもらった。

兄 どうして。

人魚 わたしがよこせと言ったんだ。いつもこのくらい素直だといいいだがな。

兄 妹はいつ出て行った。

人魚 何度も同じことを言わせるな。ここにいないじゃないか。静かにわたしを見守っている。

兄 ……。

人魚 お前は幻を探そうと必死になっているんだ。

兄 誰が妹の姿を見誤るものか。

人魚 嵐のせいで頭の調子がおかしくなっている。

兄 わたしは狂っていない。

人魚 だったら探すか。お前の幻を探すのに付き合っただけでやる。

兄 ……。

人魚 出かけよう。嵐が来る前に。

兄 ……船が沈むかもしれないぞ。いいのか、お前は泳げないのだろう。

人魚 どうせ死ぬなら海で死なせる。そこがわたしが本来いるべき場所なのだ。

兄 ……死なせるつもりはない。

人魚 わたしを見失いそうになったらこの匂いをたどってわたしを救え。

兄 そんなもの、雨と風ですぐに消えてしまう。

人魚 かつてお前たちと生きた女の匂いなのだろう。あの妹の母親の。

沈黙。兄は人魚が入った網に手をかけた。

兄 お前のほかにも人魚はいるのか。

人魚 聞いたことはある。会ったことはない。

兄 やはり歌っているのか。漁師や船乗りを食うのか。

人魚 それが人魚ならば。もつとも、声の美しさや男の趣味はわたしほどではないはずだ。

兄は人魚とともに部屋を出た。時間が経過する。外はすっかり嵐になっている。無人の部屋へ占い師がやって来る。

占い師 いないのか、誰もいないのか…：嵐はもうそこまで来ているというのに、どこへ行った。さらに険しい道を進んでいこうというのか。

占い師は顔に寄った蠅をたたき殺した。部屋を見渡すがいつのまにか蠅はいなくなっていた。

占い師 一匹だけだ。以前はあんなにたくさんいたのに。知らないあいだにどこかへ行ってしまった。蠅までも…：ずいぶんと静かになった。しかし、それだけに嵐がどれだけ強いかわかる。

占い師は嵐の音に耳を澄ます。

占い師 静かに！ 聞こえる。嵐に混じって歌声が。風と雨に混じって響いてくる声が。耳を澄ませ。それは嵐の音じゃない。この世のものとは思えない美しい調べ。人魚の声だ。

占い師が外へ出ようとすると、嵐が一気に部屋の中へ流れ込んできた。

嵐は朝まで続いたが、翌日は快晴になった。

しかし、かつてない大きさの嵐で村は滅んでしまった。

【了】

〈上演許可申請先〉下鴨車窓 hello@mogamos.link